

戦略的創造研究推進事業  
(社会技術研究開発)  
平成28年度研究開発実施報告書

「人と情報のエコシステム」研究開発領域  
「『内省と対話によって変容し続ける自己』に関するヘルス  
ケアからの提案」

研究代表者氏名 尾藤誠司  
(国立病院機構東京医療センター臨床疫学研究  
室長)

## 目次

<b>1. 研究開発プロジェクト名</b> .....	<b>2</b>
<b>2. 研究開発実施の要約</b> .....	<b>2</b>
2 - 1. 研究開発目標.....	2
2 - 2. 実施項目・内容.....	2
2 - 3. 主な結果.....	2
<b>3. 研究開発実施の具体的内容</b> .....	<b>3</b>
3 - 1. 研究開発目標.....	3
3 - 2. 実施方法・実施内容.....	5
3 - 3. 研究開発結果・成果.....	12
3 - 4. 会議等の活動.....	14
<b>4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況</b> .....	<b>14</b>
<b>5. 研究開発実施体制</b> .....	<b>14</b>
<b>6. 研究開発実施者</b> .....	<b>16</b>
<b>7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など</b> .....	<b>17</b>
7 - 1. ワークショップ等.....	17
7 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	17
7 - 3. 論文発表.....	18
7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	18
7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等.....	18
7 - 6. 知財出願.....	18

## 1. 研究開発プロジェクト名

『内省と対話によって変容し続ける自己』に関するヘルスケアからの提案

## 2. 研究開発実施の要約

### 2 - 1. 研究開発目標

プロジェクト全体の目標：「人間と情報とのなじみがよい社会」を想定したときに、人間個人が情報に対してしなやかに付き合う上での心のありかたを明らかにする。特に、個人が自らの不安感情にどのように向き合い、自己変容につなげていくかについての具体的な提案を行う。

平成28年度の目標：平成29年度に実施する実証研究の準備として、研究計画書の倫理審査を完了する。また、現時点での仮設に対し、文献的考察を加えることで、「内省と対話によって変容し続ける自己」のモデルづくりを開始する。

### 2 - 2. 実施項目・内容

プロジェクト全体の実施内容：以下のフェーズで研究開発を行っていく。

- ・ 第一段階：深層インタビュー調査等を通じた実証研究のフェーズ
- ・ 第二段階：「内省と対話によって変容し続ける自己」のモデル提示
- ・ 第三段階：医療現場、あるいはコミュニケーションを想定した思考や行動の作法の開発

平成28年度の実施内容

- ・ 第一段階としての実証研究を行う上で、既存のセオリー等について文献的な検討を行い、モデルに反映させる。また、実証研究開始までの準備を整える。

### 2 - 3. 主な結果

- ・ 文献的検討を行い、当初の概念モデルに肉付けを加えていった。
- ・ 実証研究を実施する上での倫理審査を申請し、研究開始の承認を得た。
- ・ 人工知能時代のヘルスケア現場における医療職の職能に関する検討を開始した。

### 3. 研究開発実施の具体的内容

#### 3 - 1. 研究開発目標

##### <研究の背景>

- AI/IoT が日常となった環境においては、自分自身やその他の個人、あるいは集団に関する情報が爆発的に増加する。そのような環境で予測されることは、生活環境や個人の行動がデータ化され、継続的に解析され続ける社会である。一方、情報化された個人の行動や生活環境は、その主体の意図に関わらずそれ自体が価値を生み出す。自分の意図とは別に生み出される価値を持った個人の情報に対して、どのような心構えを持つべきかについて人間は無防備な状況にある。
- 情報と人間、あるいは社会が共進するプラットフォームにおいて、情報が人間の生活を不幸にせず、より幸福にするために、人間側に対してどのように情報と付き合っていくか、どのような心構えを持つべきかについての準備が必要である。
- ヘルスケアの世界は、人間のあらゆるデータを収集し管理しようとする中で発達してきた。病院に入院する患者は常にデータを取られ、監視されている。これは、IoT 社会の将来像かもしれない。それは、患者の健康に一定の利益をもたらす仕組みだが、副作用も生んでいる。
- ヘルスケア環境における情報は基本的に人を不安にさせる情報である。「あなたは将来糖尿病になるかもしれない」という情報はダイレクトに個人に不安感情を湧き立てる。不安感情（死にたくない、病気は怖い、など）は、価値の外在化を生み出す。それは、自己価値の「If/Then 化」を進めた。「病気になるくなければ〇〇〇をきなさい」というような本がベストセラーになるような事象はその一例といえる。
- 本プロジェクトは、共進化プラットフォームにおいて、主に人間個人の「心のあり方」「情報への向き合い方」および「対話と継続的自己変容」に着目し、そのモデルを提示するプロジェクトである。共進化プラットフォームにおいては、情報の扱い方やルールについての仕組みとともに、人間と社会のあり方のモデルを準備する必要がある。特に、人の心のしくみの解明と、心のあり方についての理解を共有することは、人と情報のエコシステムをデザインするうえで極めて重要な要素と考える。

## ＜プロジェクト全体の目標＞

プロジェクト終了時に、以下の事項が達成されていることを想定する。

### 研究開発の目標

- ・ 達成目標 1：ヘルスケア社会において、専門的情報や患者個人に関する情報がどのように処理され、提供され、関係者の意識の中で咀嚼されているのかについての実証的および概念的根拠が提示される。
- ・ 達成目標 2：さらに、以上のような個人内部での心の動きが、どのように自己の変容に影響しているかについての概念モデルが提示される。
- ・ 達成目標 3：現在、さらにはAI/IoTなど次世代情報技術が発達した状況でのヘルスケア現場で行われている意思決定のプロセスにおいて、専門家が持つべき役割と機能について整理し提示される。
- ・ 達成目標 4：現在、さらにはAI/IoTなど次世代情報技術が発達した状況でのヘルスケア現場で行われている意思決定のプロセスにおいて、病を抱える主体である患者が専門情報や専門家からの助言を自らの決断に適用させるうえで必要な手順や考え方について整理し提示される。
- ・ 達成目標 5：他の複数の領域におけるプロフェッショナルとクライアントとの関係性において、「達成目標 3， 4」が提示される。
- ・ 達成目標 6：AI/IoTなど次世代情報技術が発達した状況において、個人が情報技術を自らの決断に生かしたり、他者とコミュニケーションをとったりする上でどのように利用することが望ましいかについての考え方や行動の指針が提示される。
- ・ 達成目標 7：AI/IoTなど次世代情報技術が発達した状況において、「内省と対話によって変容し続ける自己」が育成されるうえでの要件が明らかにされ提示される。
- ・ 達成目標 8：個人に対して「内省と対話」「自己変容の受容」「他者への共感」に関する行動を支援するプログラムが開発され、当該プログラムを用いたワークショップが複数回開催される。

### 研究開発成果によって派生する個人と社会の目標

- ・ 達成目標 9：研究開発上の情報発信を通じて、ヘルスケア現場における意思決定を行う上で、患者および医療専門職の意識や行動に「内省と対話」を通じた変容が起きている。
- ・ 達成目標 10：研究開発上の情報発信を通じて、異なる職種のプロフェッショナルが自らの職能や役割の変容についての意見交換が行われ、その意識が共有されている。
- ・ 達成目標 11：ヘルスケア現場および他の生活現場で「不確実性を認識すること」及び「不安を感じる」ことに対し、より積極的な意味が見いだされるようになっている。

### 3 - 2. 実施方法・実施内容

#### <期間全体を通しての方法と内容>

本研究開発プロジェクトは、3つのグループ、<1>臨床グループ（グループリーダー 名郷）、<2>哲学・倫理学・心理学グループ（グループリーダー 浅井）、<3>「こころのプログラミング」グループ（グループリーダー 竹林）がそれぞれ、あるいは協調しながら以下の作業工程を進める。その都度の進捗管理や広報などについては尾藤が統括し行う。

#### <研究開発の手順>

##### 方略A （達成目標 1, 2に対応）

- A-1: ヘルスケア現場でのコミュニケーション記録に基づいた、「意思決定の根拠」に関する分析（名郷）
  - 目的：ヘルスケア現場において、重要な決断がどのような根拠（科学的根拠、突発的な感情、資源、価値観あるいは価値、意思決定にかかわる関係者の選好、社会において支配的な考え方、等）に支えられ行われているのかについての記述を行う。さらに、どのような根拠を中心に支えられた決断が、どのような結果につながっているかについての分析を行う。
  - 研究開発方法：重要な決断を支える根拠がどのようなものから生成され、その決断をどのように支えているかについて、臨床事例および関係者へのインタビューから分析し、そこから得られる決断が悔いのないものであったかどうかについて実証的な調査も含めて明らかにする。
  - 実施期間：2016年11月—2018年3月
  
- A-2: ヘルスケア現場における意思決定において発生する認識と価値・感情の「ゆらぎ」に関する分析（浅井）
  - 目的：ヘルスケア現場において個人が価値判断を行う上で「外在する根拠（External determinants）」と「内在している根拠（Internal Determinants）」がどのような影響を及ぼすのか、さらにはそれらが交錯することで、情報に対する認識や感情にどのような影響が発生するかについての概念整理を行う。
  - 研究開発方法：倫理学、哲学、心理学、コミュニケーション学の専門家からなるタスクチームを組織し、情報に対して個人の中の「認識」「意図」「感情」「価値づけ」「責任感と覚悟」に与える影響についての分析的検討を行う。一部実証的な根拠として、患者や患者家族に対するインタビュー調査を行う。具体的には、以下についての概念的検討を行う。
    - IDとしての良心、道徳感情、不安感情、あるいは嫌悪感情について。その強さや安定性、揺らぎについて。

- ED(規範を内在させた情報)が個人の価値判断に与える好ましい部分(自己決定負担軽減、免責)と好ましくない部分(決定後の後悔)について。そのリソースとアクセスについて。
  - 不適切な(過剰または過小)情報アクセスの弊害
  - 好ましい医療決定に有用な情報源、アクセス法、そして情報とのインターアクション法について
- 実施期間：2016年11月－2018年3月
- A-3：医療コミュニケーションにおける「理解」「共感」「合意」「後悔」のスーツケースワード分析(竹林)
- 目的：ヘルスケア現場において、患者と患者を取り巻く専門家等とのコミュニケーションの中で生じる「理解」「共感」「合意」「後悔」を構成する中身について解析する。
- 研究開発方法：情報を取り入れた個人が経験する感情的変容や認知的変容、さらには、他者との対話を通じて変容する個人の価値観や認識のスキームに焦点を当て、動画等を通じて関係者間で行われているコミュニケーションの中身について分析を行う。具体的には以下のようなものを対象とする。
- ◇ 情報が人間の不安感情をどのように揺さぶるのか？
  - ◇ 不安感情が人間の認識の仕方や価値観に与える影響
  - ◇ 不安感情と自己との関係
  - ◇ 自己を保持することと、他者への依存との関係
  - ◇ 対話が自己変容に与える影響のメカニズム
- 実施期間：2016年11月－2018年9月

#### 方略B(目標3, 4に対応)

- B-1：意思決定に至るプロセス上で個人の意識に発生する「認識」「価値」「感情」「意図」の関連に関する分析(尾藤・浅井・竹林・名郷)
- 目的：ある個人が意思決定を行う上で、情報を取り入れ、他者と対話を行うときに、その個人の「認識」「価値」「感情」「意図」にどのような変化が生じるのか、そして、それぞれの関係はどのようなものなのかについて明らかにし、記述を行う。
- 研究開発方法：方略Aでの成果、および過去の文献的考察を踏まえたうえで、ホームページ上のオープンフォーラムの議論とタスクグループによる意見交換によって概念構築を行う。
- 実施期間：2017年10月－2018年10月
- B-2：意思決定支援者としての医療者の役割と職能に関する分析(浅井)
- 目的：AI/IoTなど次世代情報技術が発達した状況において、意思決定支援者としての医療専門職の役割及び職能がどのようなものに変化するのかについて考察を

行う。

- 研究開発方法：方略 A での成果、および過去の文献的考察を踏まえたうえで、タスクグループによる意見交換によって概念構築を行う。特に、クライアントとの対話能力を中心に哲学的・倫理的な観点からの考察を行う。
- 実施期間：2017 年 10 月－2018 年 10 月

#### 方略C（目標 5 に対応）

- C-1:意思決定に向かう上での専門家とクライアントとの関係性および対話に関する概念整理と現場実践（竹林・尾藤）
  - 目的：方略 B で得られた結果をもとに、AI/IoT など次世代情報技術が発達した状況において、専門家とクライアントがそれぞれどのような役割を持ちながらコミュニケーションを行うべきかについての概念的な提示を行うとともに、具体的な現場における事例モデルを収集する。
  - 研究開発方法：複数の種類の専門職にインタビュー、およびオープンフォーラムを通じて、ヘルスケア現場で構築した概念モデルを基盤に概念の対比を行う。具体的には、弁護士、弁理士、教師、投資コンサルタントなどを対象者として想定する。
  - 実施期間：2018 年 1 月-2019 年 1 月

#### 方略D（目標 6 に対応）

- D-1：情報入手と決断、対話、内省の相互関連に関する分析（尾藤・名郷）
  - 目的：AI/IoT など次世代情報技術が発達した状況において、複数のアジェンダにおいて個人がどのように考え、どのように他者と対話を行っていくのかについての概念整理を行う。
  - 研究開発方法：いくつかの具体的なアジェンダを設定しオープンフォーラムを開催する。また、ホームページ上でのネットフォーラムを行う。当該フォーラム上で交換された議論内容を分析し、「内省と対話によって変化し続ける自己」との対比を行う。アジェンダとして、以下のものを想定する。
    - ◇ リスク情報にどう向き合うか？
    - ◇ 他人との約束
    - ◇ 自分の持ち物
    - ◇ 善悪の基準と相対性
  - 実施期間：2018 年 3 月-2019 年 5 月
- D-2：AI/IoT 時代のコミュニケーションと決断に関する思考と行動のプロセス（尾藤・竹林・浅井・名郷）
  - 目的：AI/IoT など次世代情報技術が発達した状況において、個人が情報技術を自らの決断に生かしたり、他者とコミュニケーションをとったりする上での思考と行動のプロセスをまとめ、提示する。



- 研究開発方法：方略 A-C の成果を基に研究者による概念の整理を行うとともに、設定されたタスクグループによるコンセンサス形成を行う。
- 実施期間：2018 年 8 月－2019 年 2 月

#### 方略E（目標7に対応）

- E-1：「内省と対話によって変容し続ける自己」を構成する要件と、その育成方法についての分析（尾藤・浅井）
  - 目的：「内省と対話によって変容し続ける自己」を構成する要件を明らかにし、その育成方法について提案する。
  - 研究開発方法：方略 A-D の成果を基に研究者による概念の整理を行うとともに、設定されたタスクグループによるコンセンサス形成を行う。
  - 実施期間：2018 年 11 月－2019 年 2 月

#### 方略F（目標8に対応）

- F-1：「内省と対話によって変容し続ける自己」涵養のプログラム開発と検証（浅井・竹林・名郷・尾藤）
  - 目的：「内省と対話によって変容し続ける自己」を育み支援するための行動プログラムを開発し、そのプログラムの有用性について検証する。
  - 研究開発方法：タスクグループによるプログラム開発と、ワークショップの開催。ワークショップの有効性に関する成果については、開催記録と参加者の終了時評価を基に行う。
  - 実施期間：2019 年 2 月－2019 年 10 月

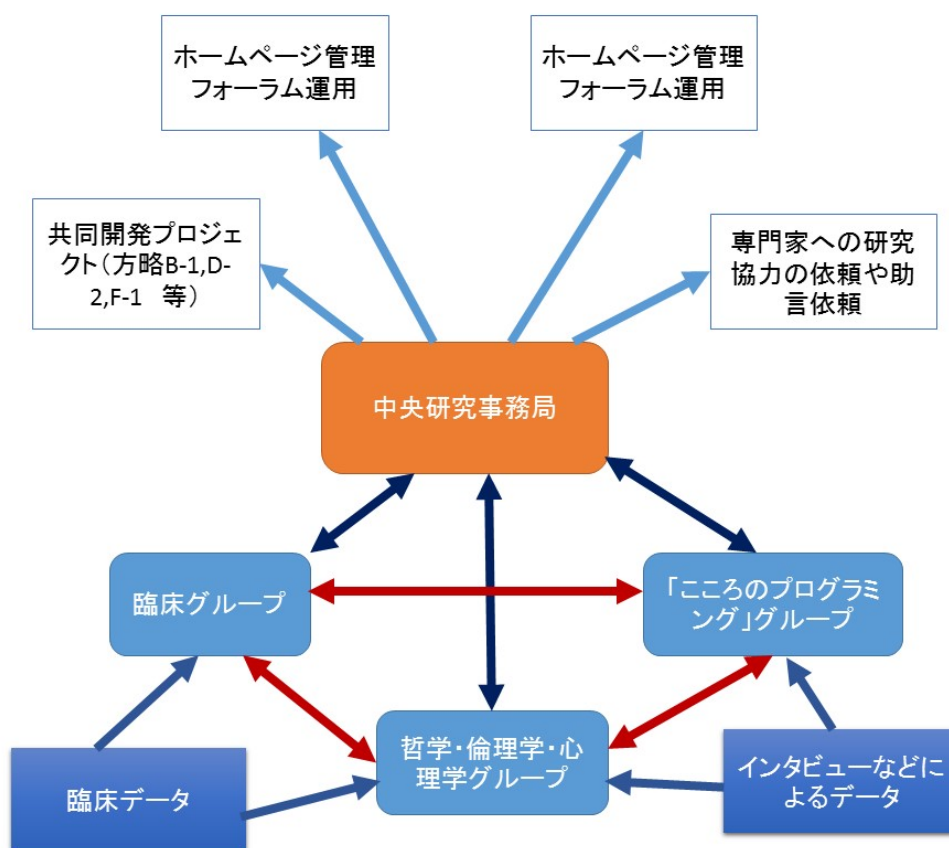
## <平成28年度に予定した実施内容>

- 研究開発グループ関係者における3年間の計画に関する会議及びワーキング
  - ◇ 2017年3月時点での見通し：グループリーダー、研究実施者および研究協力者の一部が直接顔を合わせるミーティングを1回以上2回以下実施する。ミーティングの内容は、「研究のコンセプトとアウトカムの共有」「研究計画俯瞰図の説明」「当面の目標の設定」「それぞれのグループの役割と相互補完」などとする。
  - ◇ 研究開発のポイント：より社会実装の高い成果を生み出すうえで何を開発することが必要か、ということを中心に議論を進める。また、今後の研究計画についてマイルストーンを可能な限り詳細に設置する。
  
- 研究開発プロジェクトA-1
  - ◇ 2017年3月時点での見通し：詳細な研究計画を作成する。倫理審査委員会に申請し承認を得る。実証的なデータを取得する上での現場となる医療機関を設定する。
  - ◇ 研究開発のポイント：質的研究と量的研究のハイブリッドの研究となるため、両方の方法論に詳しい専門家の協力を得る。
  
- 研究開発プロジェクトA-2
  - ◇ 2017年3月時点での見通し：詳細な研究計画を作成する。倫理審査委員会に申請し承認を得る。実証的なデータを取得する上での現場となる医療機関を設定する。
  - ◇ 研究開発のポイント：哲学的・倫理的な分析と心理学的な分析の両方をおこなう。特に情報を取り入れた際に、分の中でどのように価値づけるのかについてのしきみを、プロフェッショナリズムや良心、基本的価値観と関連付けて分析する。
  
- 研究開発プロジェクトA-3
  - ◇ 2017年3月時点での見通し：インタビューなど、人を対象とした実証的なデータを必要とする場合は、2016年度中に倫理委員会に申請し承認を得る。分析を行う上でのリソースとなりうる動画の収集を開始する。
  - ◇ 研究開発のポイント：スーツケースワードの構成要素を明らかにする上で、心理学や言語学の専門からの助言を随時得る。

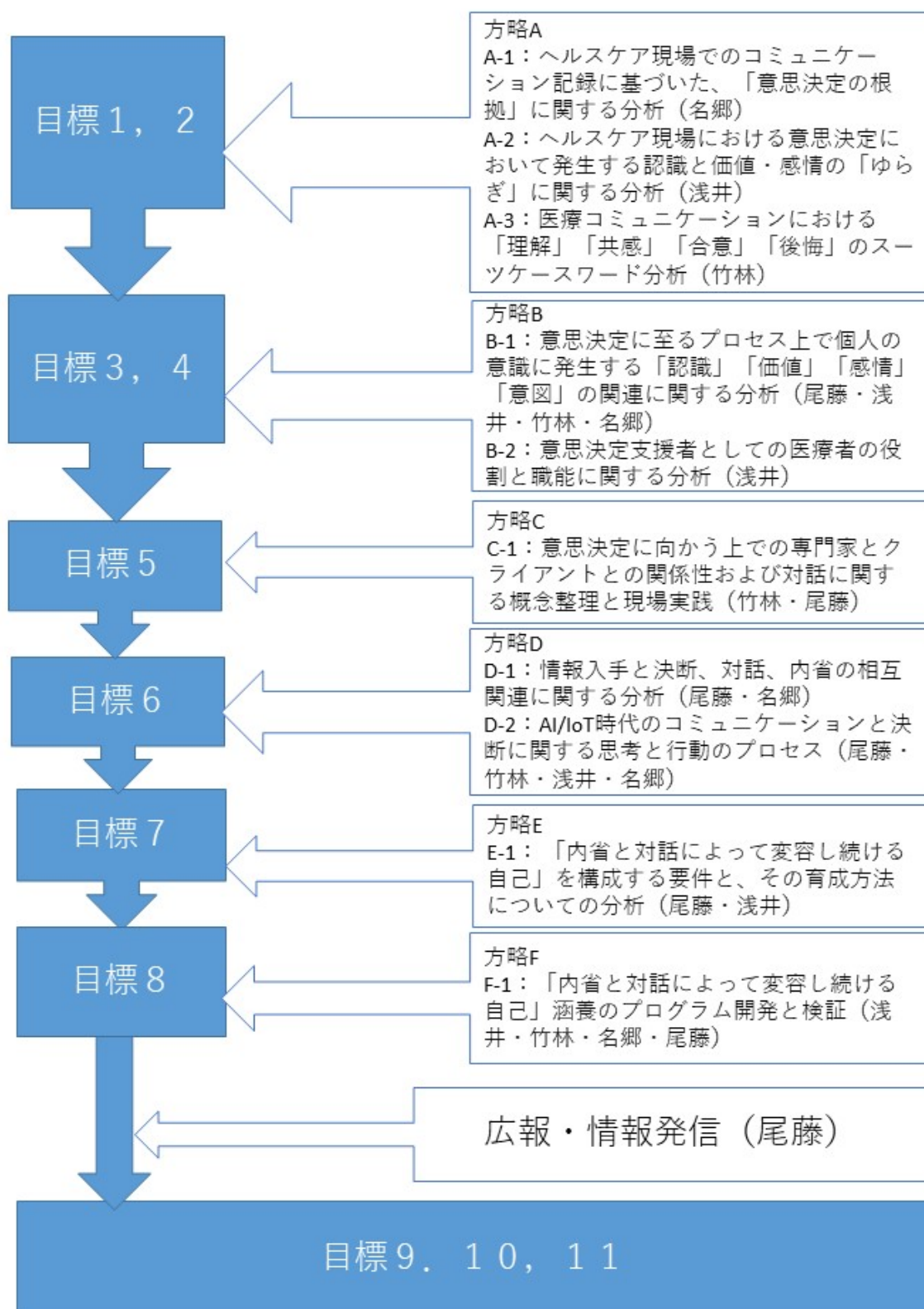
## 実施体制

それぞれの分担グループが、それぞれの目標を適宜相互補完しながら達成させるうえで効率的な動きができるように、東京医療センター臨床疫学研究室に本プロジェクトを統括する中央事務局を設置する。中央事務局と各研究グループがやり取りを行いながら、データのシェアや調査現場のシェア、分析結果のシェアを行っていく。

「内省と対話によって変化し続ける自己」中央研究事務局と各グループとの関係



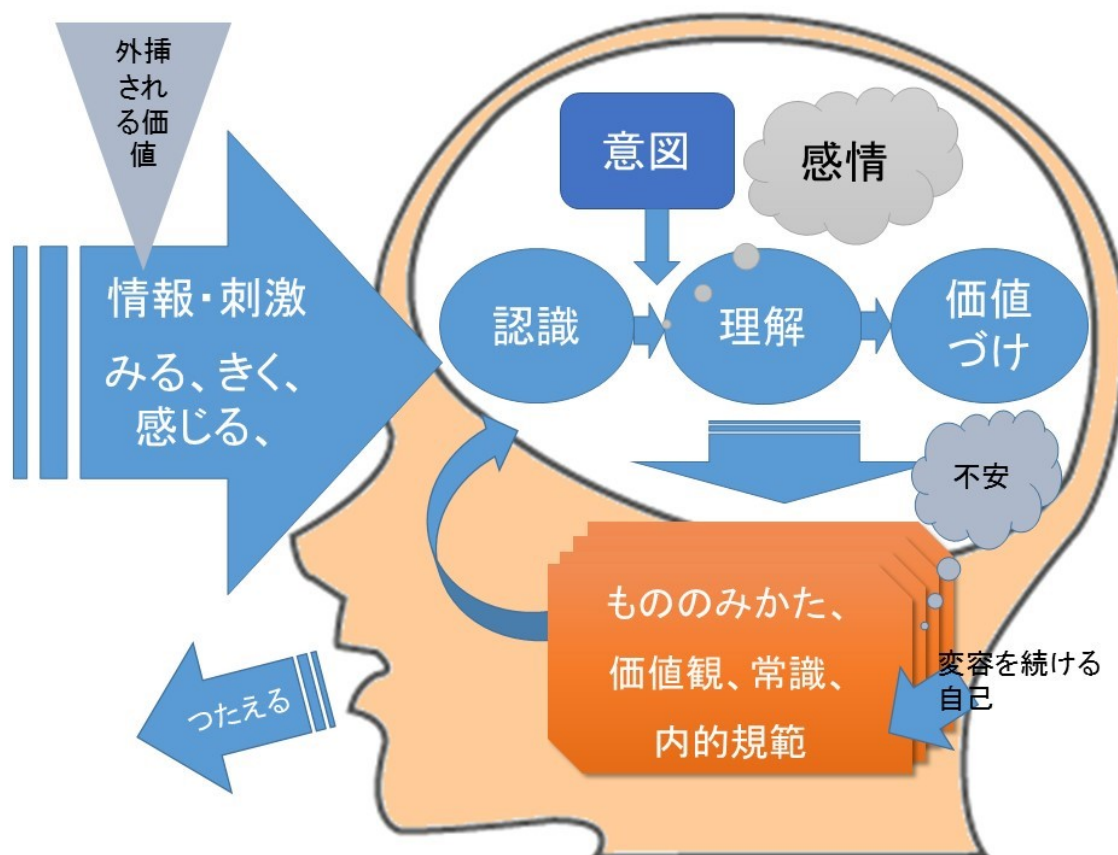
## 研究機関における各分担プロジェクトのスケジュールと達成目標との関係



### 3 - 3. 研究開発結果・成果

#### <平成28年度における研究開発の進捗状況>

- 研究開発グループ関係者における3年間の計画に関する会議及びワーキング
  - ◇ 2017年3月11日に関係する研究者を一堂に集めた班会議を開催した。当初の予定通り。「研究のコンセプトとアウトカムの共有」「研究計画俯瞰図の説明」「当面の目標の設定」「それぞれのグループの役割と相互補完」についての協議を行い、合意形成を行った。
  
- 研究開発プロジェクトA-1、A-2、A-3
  - ◇ 尾藤班（統括）、名郷班：
    - 「内省と対話によって変容し続ける自己」のモデル化を開始した。モデル化に当たって、過去の哲学的な基盤、および、過去に行われた実証的研究の成果等についての文献レビューを行った。その上で、プロジェクト提案時の概念図を下図のように改変した。



- また、実証データの収集のため「医療現場での意思決定が行われるうえで生じる、関係者間および自己の内的コンフリクトに関する理論記述分析」と題した質的調査研究を企画し、研究計画書を東京医療センター倫理審査委員会に提出した。同研究計画は、2017年5月時点で倫理委員会の承認を受け、院長の研究実施許可を取得済みである。
  
- ◇ 竹林班：「内省と対話」さらに「変容を続ける自己」について、ミンスキーの文法に基づいたスーツケースワード分析を開始した。2017年11月をめどに、A-1, A-2の成果進捗と照らし合わせ、モデル化に向けていく予定である。
  
- 研究開発プロジェクトB-2
  - ◇ 浅井班：「臨床現場に高度な意思決定支援システムが導入された状況を想定したときに、医療者にどのような職能の変化が起きるのか？また、その際に医療者に必要となる職責は何か？」ということをテーマに、ネオ・ソクラテック・ダイアログを行うための研究計画を作成した。
  
- その他
  - ◇ 本プロジェクトの中で考案された思考のアウトプットを、以下のブログで定期的に発信を開始した。
    - Note 尾藤誠司  
<https://note.mu/bitoseiji>
    - WordPress 「B氏とM氏の 今夜もプライマリ・ケア」  
<https://primarycarependialogue.wordpress.com/>

### 3 - 4. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2016/12/25	スカイプ会議		平成28年度に行う研究の進行手順および領域合宿でのプレゼン内容
2017/1/7-8	グループリーダー会議	世田谷区 (領域合宿)	研究全体の確認および今後1年間の計画、担当者の役割分担詳細
2017/3/11	研究班全体会議	品川区	研究全体像の共有、現在の進捗確認、今後の事業計画と分担、各グループでの議論、事務処理等注意事項

## 4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

現時点では未施行

## 5. 研究開発実施体制

### (1) 総括研究グループ

①リーダー：尾藤誠司：東京医療センター臨床疫学研究室：室長

#### ②実施項目

- ・ オープンフォーラム上でディスカッションを行う。
- ・ 各研究課題の進捗成果を統合し閲覧可能にする。
- ・ 哲学や心理の専門家、統計処理の専門家などの参入を促す。

### (2) 臨床グループ

①リーダー：名郷直樹：東京医療センター臨床疫学研究室：研究員

#### ②実施項目

ヘルスケア現場における意思決定と患者—医療者間のコミュニケーションに関する実証的な根拠を提示するとともに、個人の中で起こる「認識・価値・感情・意図」の連鎖、不安感情の発生と変化、および「内省と対話によって変容し続ける自己」について、ヘルスケアの文脈からの検討を行い、概念の提示に参加する。

### (3) 哲学・倫理学・心理学グループ

①リーダー：浅井篤：東北大学大学院医学系研究科：教授

#### ②実施項目

本グループでは、哲学的・倫理的および心理学的見地から、実証データも踏まえたうえで以下についての提案を行う。

- ・ 我々を取り囲む特定の価値観を内在させた情報には、どのようなものがあるのか、その主たる情報発信源は何かについて明らかにする。
- ・ 個人の価値観や人格がいかに構成されているのか（成育環境、遺伝、生来的なパーソナリティ、両親による良心の形成、人生経験など）を可能な限り明らかにする。
- ・ 特定の規範を内在させた外的情報に接して自らの内に価値に関する葛藤が生じた場合、個人の中で何が生じ、どのような行動を取るのかを探索する。内的価値観の安定性や揺らぎについても検討する。
- ・ AI/IoTなど次世代情報技術が発達した状況における専門家の新たな役割と職能について検討する。
- ・ 「内省と対話によって変容し続ける自己」を構成する要件と、その育成方法について検討し、その人間的特性を強化するための支援プログラムを開発する。

#### (4) 「こころのプログラミング」グループ

①リーダー：竹林洋一：静岡大学大学院総合科学技術研究科：教授

##### ②実施項目

- ・ ヘルスケア現場において、患者と患者を取り巻く専門家等とのコミュニケーションの中で生じる「理解」「共感」「合意」「後悔」を構成する要素について解析を行う。
- ・ 情報を受け取ったり、他者と対話をしたりするときに自己の内部で発生する「認識」「価値」「感情」「意図」と、その変化について解析を行う。
- ・ その上で、AI/IoTなど次世代情報技術が発達した状況において、専門家とクライアントがそれぞれどのような役割を持ちながらコミュニケーションを行うべきかについての概念的な提示を行う。
- ・ 「内省と対話によって変容し続ける自己」を涵養する上で、個人がどのように情報と接し続けていくべきかについて、意識と行動の関連性を明示化し、涵養プログラムに外挿する。



## 6. 研究開発実施者

研究グループ名：総括研究グループ					
	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	尾藤誠司	ビトウ セイジ	独立行政法人国立病院機構東京医療センター	臨床研究センター政策医療企画研究部臨床疫学研究室	室長
	松村真司	マツムラ シンジ	独立行政法人国立病院機構東京医療センター	臨床研究センター政策医療企画研究部臨床疫学研究室	研究員
	佐久間結子	サクマ ユウコ	独立行政法人国立病院機構東京医療センター	臨床研究センター政策医療企画研究部臨床疫学研究室	研究員
	林八千恵	ハヤシ ヤチエ	独立行政法人国立病院機構東京医療センター	臨床研究センター政策医療企画研究部臨床疫学研究室	室員
研究グループ名：臨床グループ					
	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	名郷直樹	ナゴウ ナオキ	独立行政法人国立病院機構東京医療センター	臨床研究センター政策医療企画研究部臨床疫学研究室	室員
	藤沼康樹	フジヌマ ヤスキ	千葉大学大学院看護学研究科	看護学部	特任講師
研究グループ名：哲学・倫理学・心理学グループ					
	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	浅井篤	アサイ アツシ	東北大学大学院	医学系研究科医療倫理学分野	教授
	大北全俊	オオキタ マサトシ	東北大学大学院	医学系研究科医療倫理学分野	助教
研究グループ名：「こころのプログラミング」グループ					
	氏名	フリガナ	所属機関等	所属部署等	役職 (身分)
○	竹林洋一	タケバヤシ ヨウイチ	静岡大学	大学院総合科学技術研究科	教授
	本田美和子	ホンダ ミワコ	独立行政法人国立病院機構東京医療センター	医療経営情報・高齢者ケア研究室	室長
	石川翔吾	イシカワ ショウゴ	静岡大学	大学院総合科学技術研究科	助教

## 7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

### 7-1. ワークショップ等

特になし

### 7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、DVD：特になし

(2) ウェブサイト構築：

- Note 尾藤誠司

<https://note.mu/bitoseiji>

- WordPress 「B氏とM氏の 今夜もプライマリ・ケア」

<https://primarycarependialogue.wordpress.com/>

(3) 学会（7-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

（シンポジウム等の名称、演題、年月日、場所を記載）

- ・ 尾藤誠司 日本プライマリ・ケア連合学会第13回秋季生涯教育セミナー 「関係性と価値に基づく医療」 2016/11/5 大阪府大阪市
- ・ 尾藤誠司 第70回国立病院総合医学会 シンポジウム35-1「医療現場における患者・家族への意思決定支援—少子高齢化社会の到来を見据えて—」 2016/11/12 沖縄県那覇市
- ・ 尾藤誠司 清瀬市平成28年度特定健康診査等事業「医療機関のかかり方、選び方」 2016/11/16 東京都清瀬市
- ・ 尾藤誠司 平成28年度東京都多摩小平保健所医療安全推進住民講演会 「上手な医療のかかり方～納得できる医療を受けるために知っておきたいこと～」 2016/11/24 東京都小平市
- ・ 尾藤誠司 平成28年度栃木県医療安全講習会 「医師との上手な付き合い方」 2016/12/7 栃木県 宇都宮市
- ・ 尾藤誠司 平成28年度南多摩保健所医療安全支援センター住民向け講演会 「知って得する！お医者さんとの対話術～先生との信頼関係を築くためのコツ～」 2016/12/9 東京都多摩市
- ・ 尾藤誠司 多摩立川保健所 医療安全推進担当者研修会 「あなたの”説明“は理解されていますか 医療コミュニケーションとインフォームド・コンセント」 2016/12/14 東京都 立川市
- ・ 尾藤誠司 第13回ヘルスリサーチワークショップ「未来を変える～猫型ロボットと共生する時代へ～」基調講演並びに全体討議 2017/1/28 東京都 大田区

**7-3. 論文発表**

特になし

**7-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）**

特になし

**7-5. 新聞報道・投稿、受賞等**

特になし

**7-6. 知財出願**

特になし